

長、共にモデルにつきすぎた扮装で、舞臺像としてうすよごれ過ぎてゐる。藤間房子、扇升等の演技に根本的な缺陷がうかゞはれる。役場の進五郎がよい。一般に演技は低調である。

最初の場面で村長、堀川、義治の三人が渡り鳥を見送るところ、國定忠治の赤城の山を思はせ、これが演技の卑俗性を全般的に象徴してゐる。又、最後の場面で、觀客席を見送人に見立てる主觀的な演出は、この劇の煽情性のしめくゝりをなしてゐる。

他に「かさね」と「十五年目の女房」とがある。後者は長谷川伸物としても低調で、第一幕の旗本侍の面白さだけが残る。建司、扇升が面白い。「かさね」に關しては多く言ふ餘裕を持たないから、國策劇場の批評の時に、稿を改めて論ずる。

あごがき

岡田蝶花形氏の「テンネ排斥論」は、即物主義の運動の一つのあらはれとして興味あると思ひます。

「八百藏の俊寛」は私として一つの試練でありました。どうやら無事切抜けられたやうです。私のやうな批評の仕方では、どうしても情實は入つて來ないと、自信を得ました。

「古靱の堀川」では、今迄私が意識的に排除してゐた分子を、始めて少しではあるが批評の中に取入れて見ました。成功か否かは御批判に俟ちます。

「愚劇大日向村」も、「八百藏の俊寛」の精神で貫き得ました。これは時日が足りなかつたので、少しお粗末なものになつたのは残念です。